

---

# 外なる神とIS

吼狼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

外なる神とIS

### 【Nコード】

N6923Z

### 【作者名】

吼狼

### 【あらすじ】

それは現在か過去か未来か・・・その果てで戦い流れ着いた神がいた。

名も無き外なる神は赤城志熊アカキシグマと名乗ってある世界にたどりついた。

その世界はIS・インフィニットストラトスというマルチフォーラムスーツが活躍する世界だった。

そのISが活躍する世界にあるIS学園、そこに織斑一夏とともに入学しなにを成すのか？

これはISとオリ主のクロスです。

また、デモンベインやガンダムACシリーズやスパロボOGから機体や言葉が出てきますのでご了承ください。

あとは少しクトゥルフ的なものも出ると思います。

それでもよろしければお楽しみください。

更新は不定期になると思います。

## プロローグ（前書き）

始めまして、吼狼です。

書きたくなって書いてみました。

よろしければ呼んでみてください。

あと、処女作で手探りな感じになりますのでご了承ください。

## プロローグ

それは戦っていた……

とあるソンザイを眠らせるために……

全てを賭けて……

「ちっ……ナイアルラトホテプ！」

それはナイアルラトホテプと呼ばれる一柱の神に問いかけていた。

「くっ、まさかここまでとはね……わたしという化身のうちのどれかが起こした事とは言え……面倒ね。でも、そろそろ来るはずだから……来た!!」

ナイアルラトホテプがそう言う……

「ふう、やっとアザトースを眠らせるため事ができるか……しかし……まさか協力者があいつらとはな……」

「そうね、あなたにとっては同窓会かしらね？最も新しい外なる神？」

「そう……だな……あと、俺の名前を早く決めないとな。」

そう、その最も新しい外なる神は名前が無かった。

理由はこの外なる神は元は人間だったが、ある事故の後に名前を捨てたのだ。

だから、今のその神に名前がないのだ。

その人から神になった経緯はそのうちに語られるだろう・・・

「ふむ、まさかここまでの事態とはね」

その紳士の様に話す長い金髪にオールバックの彼は6対12枚の翼を持つ魔王と呼ばれる存在、名をルシファーと言った

「こんな事になってるのかよ・・・早く止めないとまずいな。」

もう一人は黒い髪を肩くらいまで伸ばし、赤と青のオッドアイの男・彼が最も新しき旧神と呼ばれる大十字九郎という。

「汝らが居ながらなんという体たらくだ！」

小柄だが、長い銀髪の少女の名はアル・アジフという。

「とは言っても他の化身のことまでわたし達は分からないよ?」

ナイアルラトホテプは少し不満そうに言うが・・・

「それをなんとかするのが汝らの役目だろう!」

アル・アジフは怒鳴る、そこへ九郎とルシファーが

「少し、落ち着くといい、これでは勝てる戦いも勝てなくなるよ？」

「そうだぞ、アル、這い寄る混沌がちゃんと仕事できるわけないんだしな。」

アル・アジフはそれに渋々納得したのか

「まあ、這い寄る混沌が使えないうえに迷惑なのは今に始まった事じゃないからな・・・」

「あれ？これって私泣いていいですか？」

と言いながらすでに泣いているナイアルラトホテプなのだが・・・

「漫才はそこまでにしとけ・・・来るぞ!!!」

最も新しき外なる神が警告する。

それと同時に沸騰したような混沌としたナニカがこちらに迫ってきた。

「ちっ!」

全員がそれぞれ散らばる。

「奴らも呼ぶか・・・ハスター!!!クトウグア!!!」

そう叫ぶと突然六亡星の魔方陣のようなものが浮かび上がり、そこから黄色の衣を羽織り仮面を付けた長身の人のような神と燃え滾る

猛悪な太陽のような神が姿を現した。

「主よ・・・なぜ奴がここにいる!?!」

クトウグアが叫んだ。

「仕方ないじゃないですか、そういう状況なのですから」

ナイアルラトホテプがそう言う。

実はナイアルラトホテプとクトウグアは仲が悪いどころか天敵という関係である。

ちなみにハスターはクトウルフと言う神と仲が悪かったりする。

「我慢しろ、それだけ切羽詰まってる状況なのだ・・・」

そう言ってなだめる？最も新しき外なる神に

「仕方がない、主の命令だからな・・・だが、いずれ消し去ってくれ  
る!?!」

クトウグアそう言う

「それは遠慮します。」

と微笑を浮かべるナイアルラトホテプであった。

ちなみにそんなやり取りをしているとハスターが、

「準備できたそうだが、作戦は単純に我らの最大火力を叩き込めばいいとの事だ。」



ただし、九郎はシャイニングトラペゾヘドロンを直接使用するなどの事だ」

「了解、んじゃ、みんないつちよ行きますか!!」

「『『『『『』』』』』』」

まずは最も外なる神が

「インフィニティ・インパクト!!」

文字通り無限衝撃を相手に叩き込み相手を消滅させる技だ。

次にナイアルラトホテプが

「這い寄る混沌……」

自らの二つ名にもなっている技で能力は全てを侵食する（当然空間や概念すらも）

指向型術式である。

次はルシファーで

「原初の闇……そして……生み出せ!!無限熱量と無限零度!!」

これはルシファーの誇る最大級の技で結界内で無限熱量と無限零度を交互に発動させ相手を消滅させる技である。（つまりは熱膨張のすごいバージョン）

最後は大十字九郎とアル・アジフとそして翠色の髪をもつ機械神デモンベインによる。

「レムリアインパクト・アインソフオウル!!」

これはあらゆる世界から（あらゆるというのはそれこそ平行世界はおろか過去、そして未来や可能性の世界からも）召還し、その全てで無限熱量と無限重力を放つレムリアインパクトを叩き込む技だ。

それに呼応しハスターとクトウググアが窮極の風と窮極の火を叩き込む

「……………」

いきなりアザトースの気配が変わった。

「眠った……か？」

ナイアラルトホテプがそう言った……だが……

「……………!まだだ!!」

九郎が叫ぶ。

「これでは間に合わない!!」

ルシファーでさえも焦る。

「これを使うしかないか……まあ、力をそれなりに失うがそれでも皆消滅よりはマシだ。」

最も新しき外なる神の一言にナイアルラトホテプが

「そんな!!それは使ってはいけない技ですよ!!!」

「なら・・・他に方法はあるか?」

外なる神の一言にうつつと言って黙るナイアルラトホテプ

「やるか・・・皆は退避してしてくれ。」

皆が頷くと退避を始めた。

「・・・・・・・・全ての滅びを従えし滅び!!!」

その瞬間にナニ力が起きたそれと同時に最も新しき外なる神は消えた・・・

「ここは・・・？」

最も新しき外なる神はそう言つと・・・

「気がつきましたか？」

「ナイラルラトホテプか？」

「はい・・・その世界は地球がたどる世界の一つのようです。今、情報とあるものを送ります。」

「あるもの？」

疑問に思つ外なる神に・・・

「はい、ISと呼ばれる物です。

まあ、いろいろ強化しすぎて可笑しな事になってますが・・・役に立つはずです。

それが今あなたのいる世界で盾として剣としてそして翼となります。私達は今あなたの影響でその世界にこれ以上干渉できないのであとはよろしく願います。

まあ、70年もすれば力も元に戻るはずですから。」

ナイラルラトホテプからの念話？が切れた。

「・・・とりあえず、情報は・・・確かに平行宇宙のどのあたりと宇宙の時間とが必要と言つてもそれ以外にもいろいろあるだろ・・・文化とか常識や歴史の情報が一切ないのは嫌がらせか？」

考えても仕方ないとばかりに動こうとすると

「そこのお前、何をやっている？ここはIS学園の敷地内だぞ、どうやって入った？」

IS学園・・・そういえば奴が先程ISがどうの言ってたな・・・まあ詳しく知らなければ意味ないが・・・聞いてみるか

「すまないが、IS学園とはなんだ？」

と後ろを振り向くと黒い髪を腰のあたりで縛ったつり目の女がいた。スタイルは胸が大きくそれ以外は無駄な肉がないというモデル顔負けであった。(顔も美人である)  
服装はスーツでとても似合っていた。

「IS学園を知らない？ふざけているのか？」

その女性の反応に

「ふざけてなどいない・・・まあ、事情を話しても構わないが荒唐無稽で信じられんぞ？」

最も新しき外なる神がそう言つと

「とりあえず、着いてこい・・・話はそれからだ。」

女性はそう言つと

「ああ」

短く返事をした。

しばらく着いていくとある部屋に入った。  
そこは一面が白に塗られた壁にパイプイスとテーブルという質素は  
部屋だった。

「さてまずは自己紹介だ・・私の名前は織斑千冬という、このIS  
学園で教師をしている者だ。  
早速だ貴様は何者だ？」

俺には名前がない・・・どうするか・・まあ、真名は後に考えると  
してこの世界ではこう名乗るか・・・  
神なった後から使い始めた偽名で・・・

「俺の名前は赤城志熊だ。」

千冬「赤城シグマだな。」

志熊「違う、カタカナではなく漢字で志熊だ。」

千冬「冗談だ、それでは質問を開始するいいな？」

志熊「ああ、初めてくれ。」

千冬「ではお前は今までどこにいた？」

アザトースの庭なんて言っても仕方ないな・・・よし、多分あの町  
はあるだろう。

志熊「アメリカのアーカムって町に住んでいたが？」

千冬「アーカム？ちょっと待ってる……そんな町はないぞ？」

志熊「なに？あんなでかい町が無いだと？何かの間違いではないのか？」

千冬「正直に答えてくれ、お前はどこに住んでいた？」

志熊「アーカムだが？アーカムシティだ」

千冬「いい加減にしろ！！そんな町は存在しない！！！」

志熊「そう……か」

千冬「どうした？」

志熊「これは荒唐無稽な仮説だが聞いてくれるか？いや、多分真実だろう……その証拠も見せてやる」

千冬「なんだと？言ってみろ」

志熊「それを話すにはまずは俺の身の上を話さなければならぬ、  
(もつとも、真実は話さんが……)

お前は魔術師を信じるか？」

千冬「そんなものいるわけないだろ？」

志熊「俺はその魔術師だ、と言っても普通の魔術師ではなく外道の知識を使い外法を操り外道を狩る魔術師なわけだが……」

千冬「それで？」

志熊「俺はここに来るまでその魔術師を倒そうとしていたわけだが・  
・倒したはいいがその時に敵の術でこちらに飛ばされたらしい」

千冬「馬鹿な」

志熊「なら、俺の魔術を見ればいい」

さて・・・・どの術でいくか・・・・やはりここはあれだな

志熊「旧神の鍵起動！」

そう言うと空間から一冊の本が出てくる。

ちなみに志熊は魔導書を何冊も持っている、ただしそれはオリジナルと瓜二つな写本であるが・・・・（ちなみに改変とかが一切無いためオリジナルと同等の力がある）旧神の鍵は魔導書のなかでネクロノミコンを越えるといわれる魔導書である原本は石版でかの外なる神ウボ・サスラのいる場所に散らばってたとされるものである。

志熊「さて、使う術式は・・・・暴餓龍！！」

暴餓龍（作者オリジナル魔術）

名前から連想される術とはちょっと違ってあらゆる種類の武具を創造できる。

本来は邪神や魔王を喰らい尽くすための滅神兵器であり、体内で着属や武具を作り運用する空母にしてプラントのようなものである。顕現すると地球クラスの惑星の文明など一瞬で滅ぶ。

志熊「さて、作るの・・・・ナイフでいいか・・・・」



そう言うつと一本の禍々しいナイフが現れた。

千冬「!!!な・・・んだ・・・これは・・・」

志熊「これで分かっただろうか？触るなよ？魂が汚染されるぞ？」

千冬「なるほどな・・・」

志熊「それではこちらの質問だ・・・この世界の歴史や情勢を教えられ、あとは常識もか・・・」

千冬「ああ・・・まずはISつまりはインフィニット・ストラトスというのだけが知っているか？」

志熊「知らんな・・・」

千冬「篠乃之束博士が開発した宇宙空間用マルチフォームスーツだ、もつとも宇宙開発は頓挫してしまったが・・・そして、10年前に白騎士事件という事件が起きその際に2000発以上のミサイルを全て迎撃し、さらにその白騎士確保に動いた軍を一人の死者を出さずに全滅させるという事件を起こし、その後ISは戦闘機や戦車に変わり君臨することになった。

だが、ISは女性にしか扱えないという欠点により女尊男卑の世の中となってしまうた。

さらに篠乃乃博士は467個以上のISのコアを作るのを拒否しており現在世界はその今あるコアだけでやりくりしているというのが現状だ。」

志熊「なるほど・・・（ふむ、まあ機械神ほどは強くないだろう・・・脅威とはならんだろうが・・・）」

それで俺はどうなる？」

千冬「先程押収したもののの中にISがあった・・・あれはお前のか？」

志熊「そう・・・だな・・・（ナイアルラトホテプが用意したやつだし多分俺のだろう）」

？「織斑先生？ちょっといいですか？」

緑色の髪に童顔で背が低いとどう見ても子供にしか見えない女性が入ってきた、胸は平均より上なのだがあとは眼鏡か・・・

千冬「どうした山田君？」

するとその山田と言う女性と目が合った。

山田「始めまして、山田真耶といます。」

志熊「始めまして、赤城志熊だ、よろしく頼む。」

千冬「それでどうしたんだ？山田君？」

真耶「そうでした、赤城さんのISなんです・・・全然解析できなくて困ってたんです。」

千冬「ふむ、赤城は何か分かるか？」

志熊「多分、魔術のせいだろうな・・・無理に解析すれば良くて山田さんの発狂や死亡で悪ければこの周囲が汚染されてしまうだろうな。」

もつとも、解析は出来ないだろうが……」

千冬「そうか……なら、こうするしかないな……」

志熊「なんだ？」

千冬「いきなりだが、お前にはIS学園に入ってもらおう」

志熊「なるほどな……監視ってわけか」

千冬「それにIS学園はあらゆる国家や企業に属さないとっている、3年間身の振り方を考えるといい」

志熊「……まで、よく考えればIS学園は女子高だよな？俺は一応男だぞ？」

千冬「それについては問題ない、もう一人男がIS学園に入学するからな」

志熊「なに？どんな奴だ？」

千冬「織斑一夏、私の弟だ」

志熊「そうか……」この年で学園生活とは……」

こうして最も新しき外なる神こと赤城志熊はIS学園に入学することになった。



## 入学式（前書き）

早速書いてみました。

読んでみてください。

## 入学式

いきなりだが俺はそれなりに緊迫した状況下にある、もっともそれは隣の奴もそうなのであるが・・・

真耶「全員揃ってますねー？それではSHR始めますよー」

返事は無いようだ。

俺はちなみにそれどころではない・・・クラスの女子の視線を俺たちに向かっているからだ。

真耶「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」

志熊「ああ、こちらこそよろしく頼む。」

今のは話を流すために無意識のうちに出てしまった言葉のようだが・・・

真耶「はいっよろしくお願いします!」

山田先生には喜んでもらえたようだ、だからといってこちらの状況が好転するわけではないのだが・・・

真耶「じゃあ、自己紹介を出席番号順でお願いします。」

ちなみに俺はすでに意識を夢の世界に飛ばそうとしてる、いろいろ面倒になったからだ。

真耶「・・・かぎくん？赤城君？」

志熊「どうした？何かあったか？」

真耶「あのね、今みんなで自己紹介してて今赤城君の番だから自己紹介して欲しいなつて？ダメかな？」

志熊「ああ、なるほどな、さてどうするか・・・」

真耶「嫌だった？嫌だったかな？」

声も沈んで泣きそうになる山田先生、こんなんで本当にいいのかと少し思ったが・・・

志熊「赤城志熊だ、一応19歳だが気にしないでくれ、敬語とかは無くて構わない。一年間よろしく頼む。」

女子から視線を浴びながら

志熊「以上だと言いたいが・・・それでは納得しないだろう？だから・・・そうだな2つまでまずは質問に答えよう。」

すると、ハイハイハイ！！と次々に手が上がる。

志熊「なら・・・その君」

女子A「赤城の趣味はなんですか？」

志熊「ふむ・・・趣味ってほどではないが釣りをするぞ。

あとはゲーセンで遊んだりもするな」

志熊「次は君にするか」

女子B「どんな女性が好みですか？」

志熊「……わからん、すまんが俺は今まで諸事情により忙しくてそんな事考えてる暇が無かったからな……この3年間で分かれれば御の字と言ったところか……それでは以上だ、他に何かあれば俺に支障が出ない限りで聞きに来てくれて構わん」

そして、席に着く……あいつは大丈夫だろうか？見本をみせたが……

真耶「……君？織斑一夏君？」

一夏「は、はい!？」

声裏返つたな……まあ、無理もないか……

真耶「あっ、あの、お、大声出しちゃってご、ごめんね。お、怒ってる？ゴメンね、ゴメンね!でも、あのね、自己紹介、“あ”から始まって今“お”の織斑くんなんだよね。じ、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

一夏「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

真耶「ほ、本当ですか？や、約束ですよ。絶対ですよ!」

一夏はそう言つと周りを見て。



一夏「織斑一夏です、よ、よろしくお願いします。」

すると深呼吸して

一夏「以上です。」

すると女子が何人かずっこけた。

おもしろいなと志熊は思いながら

(む・・・この気配は)

するとパン！という音が鳴った。

織斑一夏の頭から・・・

一夏「げえ！関羽！！」

パン！ともう一度いい音が鳴った。

千冬「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

(関羽ね・・・女性に対してそれはないだろ・・・)

するとひゅっと志熊の頭に主席簿が来るが、パシッと受け止める。

志熊「俺がなにかしたか？」

千冬「今、変な事を考えたな？あとは教師には敬語を使え。」

(変なことだと?)

志熊「敬語については謝罪しますが、口にも出してない事で叩くのはおかしくないですか?証拠があるわけでもなしに」

千冬「顔でるからそれで読める。」

志熊「そうですねか・・・つまりは顔に出ると勝手に判断してないもないのに殴ると・・・ふざけるなよ・・・貴様みたいな奴に尽くす礼などあると思うな。」

一瞬殺気みたいなのが放たれる、それも千冬だけが感じ取れるように

千冬「す、すまなかった・・・」

千冬は怯み謝罪をすると、いきなりぽふんと頭に手を置かれ頭を撫でられた。

志熊「よく謝ったな、もういいぞ、あとすまなかったな?俺も大人気ない事して」

千冬「あ、あう／＼／」

教室でしかも皆がいる前で頭を撫でられるという羞恥プレイ?の前に顔を赤くするしかないのだった。

志熊「っと、すみませんでした。」

そう言つて頭から手を離す。

千冬「いや、気にするな／＼」

(気持ちよかつた・・・)

そんなことを思う千冬だつた。

千冬「つと、そつだ山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

真耶「い、いえ副担任ですから、これくらいはしないと……」

笑顔で答えた。

千冬「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

ん？なんか矛盾してないか？まあ、いいなどと思つてると・・・

「キヤーーーーー！！本物の千冬様よ！」

「ずつとファンでした！」

「私、お姉様に会うために北九州から来ました！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「千冬様・・・ハアハア・・・イイ！！」

・・・一番下・・・何がいいんだ？

千冬「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。まさか、私のところに集めているではいのだらうな？」

千冬は本当に鬱陶しいんだろうな・・・気持ちは分かるが・・・一応は人望だ大切にしているがいいさ。

千冬「挨拶も満足にできんのか、お前は」

一夏「いや、千冬姉、俺は・・・」スパンツ！！

千冬「織斑先生と呼べ」

一夏「…はい、織斑先生」

千冬「よし、他のものも静かにしろ。次のやつ自己紹介をしろ」

そして自己紹介は終わった、そして。

千冬「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で染みこませる。いいか、いいなら返事をする。よくなくても返事をする、私の言葉には返事しろ」

ハイといい返事が聞こえてくる、ここぞだが断るとか言ってくれぬ奴とかいればおもしろいのだが・・・いるわけないか・・・無論俺はそんなことは言わない、教わる立場だしな。

そして一時限目が終わり、休み時間

一夏「改めて始めまして、俺は織斑一夏と言います。」

志熊「こちらこそ、俺は赤城志熊だ、年上だが敬語とかはいらんかな。」

一夏「そっか、わかった、それじゃよろしくな」

志熊「ああ、せっかくの男友達だからな、仲良くしよう」

一夏「にしてもまさか千冬姉の頭撫でるとかすごいな」

志熊「あれは癖みたいなものだな・・・」

一夏「もしかしたら殴られてたかもしれないぜ？」

志熊「その時はその時だ」

その時

？「ちよつといいか？」

確か篠乃之箒だったか・・・

「「なんだ？」」

箒「ああ、その・・・」

志熊「織斑か？」

一夏「一夏でいいぜ」

志熊「なら俺も志熊と呼んでくれ」

篤「でだ」

志熊「ああ、行ってこい一夏」

一夏「んじゃ、ちょっと行ってくる」

さて、俺はこれからどうするかな・・・見世物パンダは気に入らんなが波風たてるのもな・・・寝るか・・・

そして・・・2時限目の途中・・・

真耶「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

一夏「あ、えつと・・・」

真耶「わからないところがあつたあら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

胸張って言ってるな・・・格好いいとこ見せたいのか？むしろ可愛いな・・・一般感性からすれば・・・俺には・・・わからん

一夏「先生!」

真耶「はい、織斑くん!」

一夏「ほとんど全部わかりません」

なるほどな、だからか先程から苦しんでたのか・・・

真耶「え…。ぜ、全部、ですか…？他にここまでまったく分からない人はいますか？」

一夏が俺のほうを向くが・・・もともと神なんてやっているのだ・・・それも凶悪にして猛悪な邪神を

もつとも、それは人間などの知的生命体や精神生命体の尺度の話なわけだが・・・とにかく、このようなことは1秒と掛からずに戻すターした。

多分、知識と理解ならここの生徒でも相当（ちょっと専門機関に行けばそれだけでES学園の教師を超えるだろう）俺は分かっていると返した、そしたら一夏ががっくりした。

千冬「…織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

一夏「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパンツ！といい音がした。

千冬「織斑、必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

一夏「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと…」

千冬「やれと言っている」

一夏「…はい。やります」

まあ、自業自得か・・・後で教えてやるか・・・甘いな・・・俺も・・・

そして2時限目がおわり休み時間

？「ちょっとよろしくて？」

ちなみに今は俺が一夏に勉強を教える、ちなみに俺の教え方は絵を使用したり噛み砕いて説明するあとは身近にあるもので説明できそうならそういうのも活用する。

問題は中々に熱中してるせいか周りの声が聞こえないのだが・・・

もう一度金髪の子が

？「ちょっとよろしくて？」

やはり反応はない・・・そして・・・

バン！！と机を叩いてから

？「無視しないでただけるかしら！？」

志熊「すまん、確か・・・セシリア・オルコットだったか？」

セシリア「そうです、セシリア・オルコットです。」

一夏「で？何か用か？」

セシリア「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけら



れるだけでも光栄なのに、なんなんですその態度？」

志熊「ほう？どついう事だ？」

セシリア「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

そこで一夏が・・・

一夏「あ、質問いいか？」

セシリア「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏「代表候補生つてなに？」

また、周りがずっこけた・・・おもしろいな・・・

志熊「代表候補生というのはその名の通り未来の国家代表になる候補生のことだ、つまりはエリートだな」

一夏「なるほど」

志熊「いいか？言っておくが基本的に自分で調べて理解しろ、だがそれでも分からなかったら俺らを頼れ、知らない事は恥ではない・・・  
・ 知ろうとしない事が恥だ。」

一夏「わかった。」

志熊「いいぞ、オルコット」

セシリア「んん、では・・・そう！エリートなのですわ！」

格好つけながら言うセシリアに俺はあきれるが

セシリア「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスが同じなだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただくる？」

一夏・志熊「そうか。それはラッキーだ」

セシリア「...あなたたち、馬鹿にしていますの？」

一夏「お前が幸運だって言ったんじゃないか・・・」

志熊「・・・面倒な奴だ・・・」

セシリア「まったくあなた達は男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい期待していたのに、まったくもって期待はズレですわね」

一夏「俺に期待されても困るんだが」

志熊「そうか・・・」

すでに半分聞いてない志熊

セシリア「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

志熊「それは助かるな、早速だがいち・・・」

セシリア「ISのことであれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試では唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから」

・・・こいつを利用するのは止めるか・・・

一夏「入試って、あれか？ISを動かして戦うやつなら俺も倒したぞ、教官」

志熊「すごいな、一夏」

セシリア「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

驚いてるセシリアに

一夏「女子だけではっておちじゃないのか？」

(オルコットの精神に亀裂が入った。)

一夏の追撃の一言であった。

セシリア「あなたが教官を倒したって言うの!？」

一夏「うん、まあ。たぶん」

志熊「多分だと？」

一夏「いや、だから、たぶん倒した」

セシリア「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

一夏「落ち着け？な？」

セシリア「これが落ち着いていられますか！」

それと同時に3時限目のチャイムがなった。

セシリア「っ…！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

志熊「これは・・・面倒な事に・・・なった・・・」

一夏も同じような台詞を言った。

### 3時限目の授業

この時間は千冬が教壇に立っている、ちなみに真耶は教室の後ろのほうでメモを取る準備をしていた。

千冬「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明すると、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬が言う。

千冬「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな」

面倒そうだな・・・まあ、黙っとけばいいか・・・

女子A「はいつ。織斑くんを推薦します！」

女子B「赤城さんを推薦します。」

千冬「では候補者は織斑一夏と赤城志熊…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

一夏「お、俺！？」

まあ、そういう反応するな、こいつは。

千冬「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？」

一夏「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな」

千冬「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無い」

志熊「まあ、諦める・・・この先生に何を言っても無駄だ」

千冬「他にはいないか？いないならこの二人の中から選ぶぞ」

む、他に誰かいないものか・・・すると、セシリアが机をバンツと机をたたき立ち上がる

セシリア「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

猿か・・・その猿に振り回されてる世界はなんなのだろうな？

セシリア「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

」

一夏「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシリア「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

志熊「二人とも少し落ち着け、それにオルコットが最初に日本を侮辱しなければお前の国も侮辱されなかったのだぞ？」

セシリア「決闘ですわ！」

口論での旗色が悪くなったから決闘か・・・子供らしくていいな、あ・・・俺も巻き込まれてるのか・・・などと思ってる

一夏「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

セシリア「言うておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い　いえ、奴隷にしますわよ」

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

セシリア「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですね！」

（元氣いいなこいつら・・・さて・・・寝ながら授業受けるか・・・）

一夏「ハンデはどのぐらいつける？」

セシリア「あら、早速お願いかしら？」

一夏「いや、俺がどのぐらいハンデをつけたらいいのかなーと」

すると教室に爆笑が巻き起こる。

少女A「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

少女B「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

少女C「織斑くんたちは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

少女D「しかも、もし男女間で戦争が起きたら男性陣は三日と持たないと言われてるんだよ」

その反応に俺は少し灸を据えるために怒気を少し入れて

志熊「本当にそう思っているのか？だとしたら貴様らは本当にめ  
たい精神をしているのだな。」

少女E「どうということ？」

志熊「いいか？戦争というのはそんな簡単に勝ち負けが決まるわけ  
ではない。

確かにISは優秀な兵器だろう・・・だが、戦争は正面から堂々と  
戦うわけではない。

暗殺や誘拐といった事から経済制裁や資源の供給ストップなどいく  
らでも方法はある。

例えば、お前はもしも男と女が戦争したとして家族や大切な人が人  
質になったらどうする？」

少女A「それは・・・」

志熊「それに僅か467機しかISは無い、それしか無いのに戦争  
をカバーできるわけないだろ？少し考えれば分かる事だ。

それに、ISに対する戦術も戦争中にできるだろうしな。

それらを考察して男が女に戦争をして負ける道理は無いという事だ。  
あと、ISはアラスカ条約があるとしても根本は兵器だ、勘違いす  
るな。

そして、それを覚悟しろとは言わない・・・頭の隅にでも置いとけ、  
以上だ」

千冬「赤城の言う通りISは兵器だそれだけは覚えておけ、では来  
週の月曜日に放課後第三アリーナでクラス代表の件は行う。赤城、  
織斑、オルコットは準備しておけ。では、授業を始める。」

こうして授業は進んでいった。





## 入学式（後書き）

読んでくれて有難うございます。

長すぎたりしてないでしょうか？

それでは今日は失礼します。

## 異界からの王と事故（前書き）

今回はオリジナルストーリーが混ざります。

それでは始めます。

## 異界からの王と事故

今は昼休みである。

箒「私はあの人とは関係ない!!」

篠乃之が大声を出し教室の空気が一瞬悪くなるという事以外はたいした事もなかった。

ちなみに篠乃之箒は篠乃之束の妹である。

(あの姉妹は仲が悪いのか? まあ、俺がどうこうする問題ではないが……)

志熊「一夏、飯を食いに行かないか?」

一夏「ああ、そつだ! 箒も誘っていいか?」

志熊「構わんぞ?」

一夏「サンキュー」

一夏は篠乃之を誘いに行ったが気づいたら投げられていた……

志熊「ほう……投げ方としては悪くないな。」

その後学食にて……

一夏「なあ、箒、お前がISについて教えてくれよ」

篤「わ、私がか!？」

一夏「千冬姉に教わってもいいんだけど千冬姉は忙しいだろうし身内びいきって思われても困るしな」

志熊「篠乃之、いいのではないか? 教えるのもまた勉強になるしな。」

篤「し、しかし・・・」

すると一人の女子が話しかけてきた

女子「ちょっといいかな?」

その女子はリボンの色が違っていた。  
つまりは上級生である。

女子「君達がうわさの男子生徒君達でしょ? イギリスの代表候補生と試合することになったっていう」

一夏「ええ、そうですけど?」

女子「君達ってISの機動時間ってどのくらい?」

一夏「多分、30分くらいかと・・・」

志熊「俺は1時間くらいか(実際は0分だな・・・俺のISは待機形態からずっとこのままだしな・・・反応はあるが動かないと・・・」

「(」

女子「それじゃあ代表候補生には勝てないよ。代表候補生は機動時間3桁はいつてるから。ねえ、よかったら私がISについて教えてあげよっか？」

一夏「助かります。それじゃあ・・・」

篤「結構です。私が教えることになっていきますから」

女子「でも、あなたも1年生でしょ？そしたら上級生の私が教えたほうがいいんじゃない？」

篤「私は！篠ノ之束の妹ですから」

女子「っ！？そう・・・それなら大丈夫ね」

するとその女子は去っていった。

一夏「篤お前が教えてくれるのか？あんまり乗り気じゃないみたいだったけど・・・」

篤「うるさい！・・・それより剣道の腕がなまってないか確かめてやる。放課後剣道場に来い」

一夏「いや、俺はISの事を教えてほしいんだけど・・・」

志熊「いや、案外いいのではないか？ISの動きは操縦者の動きがダイレクトに伝わるからな」

一夏「わかったよ」

志熊「まあ、知識は俺がなんとかしてみる」

一夏「頼む」

そして放課後……

箒「……どういふことだ？」

一夏「どういふことっていわれても……」

箒「なぜ! どうしてここまで弱くなっている!？」

志熊「箒(食堂で箒と呼んでくれと言われた。(責めるのは構わんが……一夏をここで潰すなよ?)」

その後箒に散々に扱かれた一夏であった。

帰り道にて志熊と一夏は山田真耶の呼び止められていた。

真耶「織斑君、赤城君、ちょっといいですか？」

一夏・志熊「なんですか？」

真耶「貴方たちの部屋割りが決まったので伝えにきました。」

一夏「え? でも、俺は一週間は自宅から通学のはずでは?」

志熊「誘拐とかの対処だろう。(俺はあの部屋でも構わないが……

」(

ちなみに志熊が今までいた部屋は所謂取り調べ用の部屋である。

一夏「でも、荷物とか取りに行かないと」

千冬「安心しろ、それは私がやっておいた。

服と携帯の充電器と小物があれば十分だろう。」

一夏「……ありがとうございます……」

娯楽が一つも無いのが不満な一夏であった。

志熊「つ!!?!?……悪いが、一夏は先に帰ってくれ。

俺は忘れ物をした。」

一夏「わかった。」

真耶「それでは寄り道しないで下さいね?」

ちなみに学校から寮まで50メートルくらいだ寄り道するところなど無い。

そして校舎に戻った志熊は

志熊「出て来い……すでに分かっている。」

?「そうか、流石はルシファアの友だ。」

志熊「貴様は誰だ?」



？「我が名はアンリ・マンユだ。ルシファーが治める魔界とは別の魔界を統治している。」

志熊「ほう？それでそのアンリ・マンユがなんの用だ？」

アンリ「なに、貴様の力が知りたくてな・・・ゆくぞ！！」

言い終わると同時にアンリ・マンユは地面から無数の紫色の氷柱を生やした。

それは志熊に当たる前に全てかき消された。

そう、志熊の術によって。

志熊「イマジンキャンセラー・・・所謂魔術等に対するカウンター  
スペルだな。

次は俺の番だ・・・暴餓龍・・・創造・・・神喰の槍！！」

そう言うと志熊の手に禍々しい黒に赤いスジが入った西洋風の槍が現れた。（モデルはクロスボーンガンダムX2のショットランサー）

志熊「ふっ！！」

常人では見る事が出来ない速度で突撃を仕掛ける志熊、速度は軽く超音速の領域だろう・・・衝撃波は魔術で消し去っているので影響はない。

アンリ「なるほど・・・確かに弱体化したな・・・だが、この世界で過ごすには十分すぎるな。」

槍とアンリ・マンユの爪が何度も交差する。

秒間で100回以上の交差をするほどの戦闘が一時半ほど続いた時に。

志熊「槍よ・・・敵を穿て!!」

槍が甲高い音を出しながら回転する。

そして、今までで一番早い速度で突貫する志熊・・・それはアンリ・マンユを貫きそして・・・ただいま絶賛入浴中の大浴場に突っ込む事になった・・・

バガーン!!!

志熊「奴は分霊だったか・・・まあ、倒せたのだからよしとするか・・・」

？「ほう？何がよしなんだ？」

志熊「む？・・・ああ、なるほどな、奴の策に嵌ったか？」

するとキャーーーーー!!!!!!

と女子の声が聞こえた。

志熊「すまん、千冬先生、壁を壊してしまった。」

千冬「それよりも・・・さっさと出てけ!!」

ゴスツ！と志熊の鳩尾に拳が当たった・・・もつとも、身体の強化のせいで志熊にダメージは一切無いのだが・・・

そして、部屋に着くと・・・

志熊「なかなかの部屋だな、監視カメラや盗聴器もないな。」

志熊は一人部屋で一夏と筭の隣である。

志熊「そういえば、先程隣の部屋のドアを見たら穴だらけだったな。」

コンコン・・・

志熊「誰だ？」

ガチャ・・・

千冬「ちよつといいか？」

志熊「ああ・・・」

千冬「先程の事だが・・・何があった？」

志熊「力試し？ってところか・・・”こちら側”の事だから干渉しないほうがいい」

千冬「・・・だが、壁の件はそうもいかんぞ？」

志熊「それは後で直しておく」

千冬「どうやってだ？」

志熊「魔術でだ」

千冬「見てもいいか？」

志熊「……（まあ、あの魔術くらいなら問題ないか……）いいぞ」

千冬「では、後でな」

ボタン「……」

志熊「さて、少し調べるとするか……オルコットの事でも……なしばらくして……ジャージ姿の千冬とともに壊れた壁のところへ来ていた。

普通に考えれば超音速で突っ込んできたら壁が壊れるどころではないが、アンリ・マンユのせいで威力が減殺されあの程度の被害で済んだのだった。

千冬「それで、どうやるんだ？」

志熊「簡単だ……時よ巻き戻れ……」

まるで逆再生するかのように壁に破片がはめられて元に戻っていく。

千冬「……すごいな」

志熊「まあ、時間関係は基本的に難しいからな（人間から見ればだが）」

千冬「他にも直せたりできるか？」

志熊「便利屋にはならないぞ？」

千冬「別にいいだろ？風呂に入ってきたのだしな」

志熊「1回だけだ・・・」

千冬「ああ、分かった」

こうして夜は過ぎていった・・・

次の日に一夏に専用ISが来るという情報が来た。

一夏「俺専用ISかぁ・・・どんなのかな？」

千冬「さあな、私のところには情報は無いからなんとも言えんな」

篤「とりあえず剣道場に行くぞ！」

志熊「行つて来い」

千冬「お前は行かないのか？」

志熊「俺は俺のISの事で手一杯なんでな」

千冬「動かなければ訓練機でやるしかないな」

志熊「そう・・・だな（訓練機はラファールが使えるればいいが）」

そしてすぐに決闘の日が来た。

## 異界からの王と事故（後書き）

今回はちょっと短いですかね？

長さは気分で変わりますのでご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6923z/>

---

外なる神とIS

2011年12月24日04時45分発行